株式会社 ハッピー

京都 HEAD OFFICE　〒611-0041 京都府宇治市槇島町目川70番地の1
TEL：0120-88-6868　FAX：0120-88-3937
E-mail：happy@kyoto-happy.co.jp

東京 OFFICE SHOP　〒104-0061 東京都中央区銀座2-6-7　アルフレッド ダンヒル銀座本店内
TEL·FAX：03-3562-1688
E-mail：dunhill@kyoto-happy.co.jp

HxH ケア·メンテ サービス サロン　〒663-8204 兵庫県西宮市高松町14番地1号　西宮阪急3F
TEL：0798-62-7565

U R L　www.kyoto-happy.co.jp　www.dunhill-happy.com

「幸」は(株)ハッピーの登録商標です

Happy TOKYO·KYOTO ケア·メンテ®
Happy · Care & Maintenance

目次

挽物指物彫物曲物 02
柔らかアタマとやせ我慢 04
木の個性を活かす 06
木地をつくる 08
柔らかアタマ 10
やせ我慢 12
京都から世界を見る⑥ 14

挽物指物彫物曲物

木工芸にはいくつか種類がある。板や棒を組み合わせる「指物（さしもの）」、ノミなど刃物で彫って形を作っていく「彫物（ほりもの）」、熱湯に浸したり熱い蒸気で柔らかくした素材を円状に曲げる「曲物（まげもの）」。そして、ろくろを回して刃物で削り、円状に仕上げていく「轆轤細工（挽物：ひきもの）」がある。

ろくろは大陸アジアから日本に渡ってきたようだ。弥生時代の遺跡である唐古遺跡（奈良県）からろくろ細工が出土されていることからすると、すでに弥生時代に日本の人々は、ろくろ細工を日常で使用してていたことになる。

ろくろを使って皿やお盆、小物入れなどをつくる木地師たちは定住せず、山から山へ木を探して渡り歩き、製作をしながら生活をしていた。そのため、恋人や家族で仕事をしていた。定住しないから、血縁なき師匠ー弟子の徒弟関係がとれなかったのだ。

挽物、ろくろ細工の技は父から子へと受け継がれる。定住するようになった現在でも、それは変わらない。

柔らかアタマとやせ我慢

木地師・綾部之

綾部之（あやべ ゆき）１９４４年、京都府生まれ。高校を卒業後、木工芸の家業を継ぎたくなかったので大学進学を目指すが、受験に４度失敗。

「しゃあないな、と。そんでじいさん（父親）に『もうすることないし仕事するわ』いうて。じいさん、『ほな、したら』って。本心は嬉しかったかもわからんね」

山歩きが好きで、浪人中にもしょっちゅう登山をいていた。山に登っては、いろんな土地の郷土資料館や博物館で、民芸品や工芸品も見て回った。

そうした体験や、子どものころからの手伝いが生きて、この仕事に入ってもなんら違和感はなかった。むしろ、自然体でろくろを回していた。

ろくろに取り付けた、高速で回る木地に刃物（かんな）をあてる。ほんの一瞬の油断で、かんなが木地に深く食い込んであっという間に作品をダメにする。あるいは、木地が留め具からはずれ、ろくろに近づけた顔をめがけて飛んでくることもある。実は、ろくろ細工は危険な作業でもある。

だが、この仕事に就いてよかったと思っている。

「それほど儲かる仕事ではないし、ボクの銘を彫るわけじゃないけど、いいものつくれば１００年、２００年残りますから」

それが職人の気質かと問うと、

「ま、やせ我慢かな（笑）」

木の個性を活かす

香合や茶器、お盆などの小道具などなじみ深いろくろ細工は、同心円状のために形は左右対称で味わい深い。

たとえば香合なら柿、茶器なら松と、使う木が違えば色や木目も違い、個性が出てくる。

ほかに槇、杉、檜など約30種類の木材を素材に使う。白檀や黒檀など高級なものもあるが、綾部さんが選ぶ素材はむしろ「庶民的」な木だ。

素材は「庶民的」でも、遺跡の出土品のように地中深くに長い間眠っていた素材もある。

「これなんか、ぱっと見てどう思います？」

綾部さんは、6500年前の埋もれ木を見せてくれた。真っ黒で、とても軽い。炭化しているのかもしれない。それは、中国の長江支流で見つかったという。

「こんなものあるよ」

弥生時代の田んぼの跡から見つかった木も、素材置き場から出してきて見せてくれた。

土中から掘り出された埋もれ木の中で、数百年から数千年の年月を経たものを、特に神代（じんだい）と呼ぶ。火山の噴火や洪水で埋もれた木、田んぼに埋もれていた木、土質によって木の色は変わる。

数千年の歴史を経た木も、ある程度加工しなければ使えないそうだ。知らない人なら捨ててしまうような木も、木地師の手によれば、使えるものに美しく変わる。

木地師とは木の個性を見つけて活かす仕事だ。

木地をつくる

木地師の大事な仕事のひとつは、木を選ぶところから始まる。丸太1本、材木問屋で仕入れる原木は、ときに数百万、1千万円するものもある。

仕入れた原木も、そのままでは作業に取りかかれない。木を自然乾燥させることが、木地師の大事な仕事だひとつだ、と綾部さんはいう。

今は人工的に乾燥させることもできるが、それでは木がざらついて削りにくく、何年も経てばゆがみなどが生じやすいそうだ。したがって、白然乾燥。日本独白の寒暖や湿度の差にたゆたわすように、木を少しずつ乾燥させていくと、切断の際に木本来の艶の強さが現れてくる。木を白然乾燥させることを「養生」といい、最低でも10年以上、つくるものによっては何十年とかけるそうだ。

つまり、10年以上先を見て仕事をしなければならない。

素材はまず製材機で切り、ろくろにはめる大きさまで成形する。それを、ろくろへはめ込む「はめ型」、ツメに引っかけて固定する「ツメ」でろくをに固定し、ろくろ挽きの作業に移る。

ろくろを挽くときには、先端が刃物になっている「ろくろかんな」を最も使う。木地に穴を開けるときには「やりかんな」だ。削り終われば紙ヤスリでなめらかに仕上げる。

20種類以上の木材と、多様な刃物。入れる力の加減を微妙に変えてのろくろ挽きだ。

柔らかアタマ

道具と素材が山積み。

「だいたいどこにどんな木を置いたかは覚えてるんですけど、（素材の山を）ひっくり返してみると違っていたり……、でも道具はちゃんと覚えてます（笑）」

仕事場の壁一面、棚いっぱいに父から受け継いだかんなをはじめとする工具が並べられている。これらすべて、どこに何があるかを綾部さんは把握している。

工具は、綾部さんの身体の一部であるかのようだ。「ろくろかんな」「やりかんな」は、刃物屋では売っていない特殊なかんなだ。だから、自分で造る。炭で火をおこし、先端を曲げ、研ぐ。この工程をすべて自分でやる。

「木地師は刃物造りが一番肝心なんです。刃物造りができなければ、仕事ができない」

あるとき、極細の模様を挽くための、極細のろくろかんなが必要になった。

「そんな細いかんな、どうしたらつくれる？　白転車のあれ、ええんとんちゃう？　って」

白転車のスポーク（車輪にある線状部品）をつかった。

「そういうのが、おもしろいんですよ」

木地を形にする前に、その形をつくる道具から出発する。だからこそ、道具づくりが肝心になる。

「職人てね、アタマが柔軟やなかったらできひん。ガンコとか拘りとか、そんなのええことないですよ。型にはまってたら、先に進まれへん」

１００年後にも不変に残るものを、進化しつつつくり続ける。

やせ我慢

綾部さんは、木を活かすのが自分の仕事だと考えている。

木も人間と同じようにこの世に生を受けたものだから、手前勝手にひねくり回すのではなく、その性質を活かしたものをつくる。使えないところは、ダルマストーブで焚いて暖をとる。燃えてできた灰は、庭木に撒いて再び命の糧になる。

木を余すところなく活かす。それが、職人として木に向き合う姿勢だ。

若いときに山歩きに親しんだ名残か、ふらりと小旅行にでるときがある。旅先では郷土資料館や博物館に立ち寄って、工芸品を観て会話をする。

100年前の「物」と対話をするのだ。

「ずっとこの仕事をしてたら、『えらい荒っぽう使われたんやね』『お姫さまのように大事にされたんやね』『急ぎ仕事でつくられたんか？』、話かけると、『そうや』と声が聞こえるようになってきます」

そうなるまで、うつむき加減にひたすら仕事をするのが職人への入り口である、と。

「菅茶山が、『ないしょ（懐具介）は知らねど　こころ燃かに』って書き残してありますね。やせ我慢かもしれないですけど、そういうふうにやっていこうと思ってます」

菅茶山（かん ちゃざん）延享五（1748）年～文政十（1827）年。江戸時代後期の儒学者、漢詩人。

幸 vol.16

制作●亀本文子・通信教育部芸術学部デザイン科４年●坂田和陽・芸術学部美術工芸学科２年●田川怜奈・芸術学部情報デザイン学科３年●吉尾枝里子・芸術学部情報デザイン学科３年　写真●小島芳秀　指導●村田信之・京都造形芸術大学客員教授●中西洋一・京都造形芸術大学准教授●米原有二・サクラエディトリアルワークス　監修●高野孟・京都造形芸術大学客員教授　編集●京都造形芸術大学　606-8271京都市左京区北白川瓜生山2-116　発行人●橋本英夫・株式会社ハッピー

京都から世界を見る⑥
木は日本人の心

「日本は世界一長く続いた木の文明国である」とオークビレッジの稲本正が書いている（『森と生きる』角川書店）。世界中どこでも、人類の祖先はまず木を使って道具を作ることを始めたが、森がさほど豊かでないところでは、たちまち刈りつくしてしまったのだろうか、早々に鉄と石の文明に移行した。ギリシャ・ローマにしてからがすでにそうだったし、そのローマを起点に全ヨーロッパに波及したキリスト教は、ゲルマン民族の住む北方の森を悪魔の潜む不気味な場所と捉えて、むしろ木を敵視しさえした。イスラムもインドも中国も主流は鉄と石で、日本ほど多種多様な木の特性を見極めて、緻密極まりない加工技術を駆使して、家屋や神社をはじめありとあらゆる生活具から美術工芸品までも作り分けてきた数千年もの歴史を持つ国は、他に例がない。

それはもちろん、高温多湿で急峻な山が多く、世界２番目の工業国になった今でも国土の３分の２が森林で覆われているという気候風土の特徴に根ざしていることだが、日本がさらに特殊なのは、大陸の南西に連なる照葉樹林と北西に連なる針葉樹林とがこの列島で出会って、例えば縄文は照葉樹文明だが弥生は針葉樹文明だというように、異質なものが巧みに絡み合いながら多彩な展開を遂げてきていることである。おまけに、寒流と暖流がこの列島の両側でぶつかり合うことの影響もあって四季の変化がことさら鮮やかで、森の量の多さだけでなく質の高さを生み出しているのだろう。日本人の類い希な繊細な感性は、森や木と共にある暮らしによって育まれてきたと言って過言でない。

木に神が宿ると感じる樹木信仰は世界中にあるが、今日も全国に８万もの神社と鎮守の杜を持つ国などどこにもない。木は日本人の心であり、その読心術のプロが木地師である。

高野 孟（たかの・はじめ）
一九四四年東京生まれ、一九六八年早稲田大学文学部西洋哲学科卒。通信社、広告会社勤務の後、一九七五年からフリー・ジャーナリストに。
同時に内外政経ニュースレター『インサイダー』の創刊に参加、一九八〇年に株式会社インサイダーを設立し、代表取締役兼編集長に就任し現在に至る。